鴨川シーワールド　生物の豆辞典　No.16

シーワールドのアニマル達

◎生きている化石「オウムガイ」

鴨川シーワールドでは、オウムガイを昭和55年4月24日に2匹、5月8日に3匹購入し飼育を開始しました。このオウムガイは、魚類のシーラカンスや甲殻類(こうかくるい)のカブトガニとならんで、「生きている化石」といわれている軟体動物（イカ・タコ・カイ）の仲間で、英名をノーチラスと呼び、主にフィリピン・ニューカレドニア・ニューギニアなどのあたたかい海の水面から水深 600ｍまでの間で生活し、甲殻類（カニ・エビ）などを食べて生息しています。

現在、搬入された5匹のうちの4匹が、水温22℃に保たれた幅90cmの四角のガラス水槽で、元気に飼育記録をのばしています。何もいわずに、じっとしていることの多いオウムガイですが、それでも毎日、エビとイワシを15ｇ位いたべながら、からだもひとまわり大きくなり、初めは272ｇから755ｇであった体重も、今では490ｇから895ｇにも成長しました。また、水槽の隅に乳白色の卵を産むことがありましたが、発生するまでにいたっていません。この人間より古い歴史をもつといわれる古代の生物「オウムガイ」については、生態などがよくわかっていません。これからも長く飼育を続けて、オウムガイの生態を少しでもあきらかにしてゆきたいと思っています。

（平塚）

「生きている化石」オウムガイ *Nautilus pompilius*

開館10周年記念「児童動物画コンクール」

昭和55年10月で鴨川シーワールドも10年目を迎えました。それを記念して鴨川市内小学生、幼稚園児より動物絵画を募集しましたところ、405点の応募がありました。応募の中より、鴨川市立鴨川中学校松崎先生他5人の先生方による厳正な審査の結果、次の方々が入賞されました。

特別賞

日本動物園水族館協会会長賞
大山小学校4年　篠原　正樹
鴨川市教育長賞
東条小学校6年　古谷野克己
鴨川シーワールド水族館長賞
西条小学校1年　小倉　有二

金賞

学校	氏名
鴨川小学校1年	戸倉　丈
鴨川小学校2年	山田　麻礼
西条小学校3年	刈込　茂幸
大山小学校4年	柴崎　正
鴨川小学校5年	横山　勝則
江見小学校6年	矢沢　浩司

銀賞

学校	氏名
江見小学校1年	河名美奈子
西条小学校1年	杉浦　珠紀
鴨川小学校2年	加藤　隆弘
東条小学校2年	鈴木健太郎
鴨川小学校3年	高滝　政彦
東条小学校3年	森野　昌孝
西条小学校4年	流山　敬之
大山小学校4年	柴崎　英晃
曽呂小学校5年	畠山祐一郎
太海小学校5年	星野　誠
田原小学校6年	永井　道夫
西条小学校6年	山口　新治

銅賞

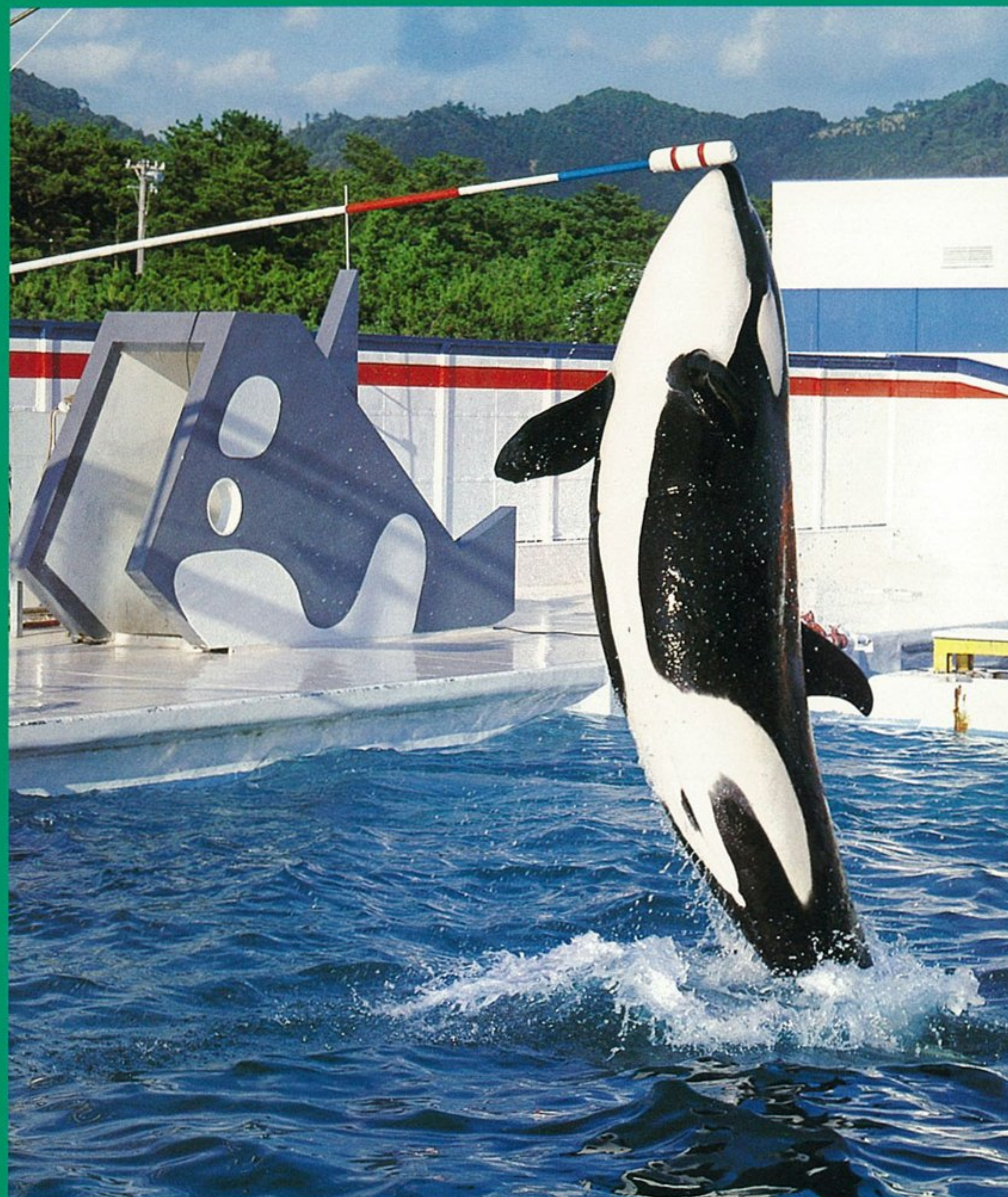
学校	氏名
吉尾小学校1年	石井　美香
大山小学校1年	戸倉　みほ
鴨川小学校1年	阿部　佳鈴
大山小学校2年	渡辺　真路
東条小学校2年	島津　雅好
主基小学校2年	佐々間信行
江見小学校3年	大川　浩之
主基小学校3年	白銀　秀明
江見小学校3年	河名　孝哲
曽呂小学校4年	田中　孝子
太海小学校4年	川上　恵美
西条小学校4年	槽谷　明美
鴨川小学校5年	松本　芳夫
吉尾小学校5年	滝口　俊孝
太海小学校5年	鈴木美和子
太海小学校6年	田丸　藤恵
太海小学校6年	小池　弘
東条小学校6年	竹石　靖

入賞された方々のうち特別賞3人と金賞6人は12月21日鴨川シーワールドにて表彰式が行なわれました。また入賞作品等の力作は1月31日まで、鴨川シーワールド中央ホールに展示されました。

表紙説明

白黒の美しい体色をしたサカマタ（シャチ）は、世界の海洋を泳ぎまわる唯一のクジラの仲間で、コスモポリタンとして知られている。しかし、白と黒の体色は、クジラ、イルカの仲間にも数種類見られるが、その理由は良く判っていない。

さかまた No.16
編集・発行　鴨川シーワールド
発行日 昭和56年2月

〒296 千葉県鴨川市東町 1464―18
☎ 04709（2）2121

◎シャチたちの一年

昭和55年2月11日に鴨川シーワールドへやってきたオス・メス2頭のシャチは、「オルカ325」という、プロジェクトチームによって、飼育調教がおこなわれて、昭和55年3月20日からは一般に公開され、みなさんから「キング」「カレン」という名前をもらい、元気に一年をむかえました。

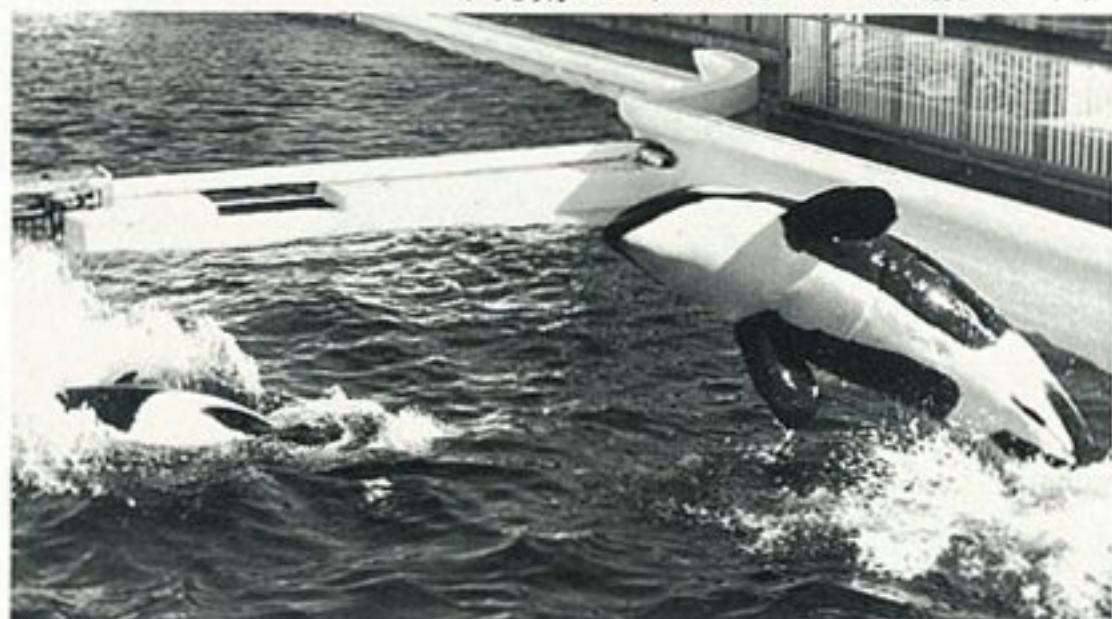
▼プールに無事到着

アイスランドで捕まえられたこの2頭のシャチは、途中カナダのナイアガラマリンランドに蓄養された後、日本まで約30時間という長旅を経験したにもかかわらず、大病もせずすくすくと成長しています。今では、専用の小さなプールから中央の大きなプールにイルカと入れかわりに出ていき、10種目以上の芸を見せてくれています。体長もこの一年で少し大きくなり、キングは392cmに、カレンは400cmになりました。

▼係員とシャチのスキンシップ

シャチたちの食事は、今では、一日にそれぞれ30kgのサバをペロリとたべてしまうほどですが、はじめは、エサのたべ方がおもわしくなく、とくにオスのキングは、エサをくいちぎることが多く、思うようにエサをたべてくれませんでした。そこで、ニシン、イカ、生きたサバなど、エサをいろいろ変えたり、エサの切り方を工夫したりしましたが、ようやく、骨を取り除いたサバの三枚おろしで、たべ方も良くなってきました。こうして、エサの量も増え、サバの切身もたべられるようになりました。しかし、今でも、ちょっと気に入らないことがあると、すぐにエサをかみつぶしたり、たべ方がわるくなることがあります。

飼育をはじめて、エサのたべ方の他に、もう一つ気になることがありました。それは、二頭のシャチに寄生虫の条虫がいることでした。野生の時、エサの魚から感染(かんせん)したものでしょうが、毎日のように、肛門から糸を引くように、条虫がでてくるのです。おもしろいことに、一頭から条虫がでてくると、その条虫をもう一頭のシャチが、手伝うように、くわえて引っぱり出す行動が見られました。たまたま、その事に夢中になって、ショーを行なわなくなることもありました。健康上の問題として駆虫剤(くちゅうざい)(虫くだし)を与えたところ効き目があって、キングから1.2kg、カレンから0.65kgもの条虫が出てきました。中にはなんと長さが、6.9mもの条虫がいて、係員もびっくりしてしまいました。その後は、ぴたりと、条虫を出すことはなくなり、寄生虫の問題は解決しました。

▼元気にジャンプしている2頭のシャチ

シャチ達の行動も、シーワールドにやって来た初めのころは、プールの隅にほとんど動かずに浮いていることが多くみられました。
はやく、なれてもらおうと、係員が、水中に入り、エサを与えたり、遊んであげることを続けたところ、最初は、恐る恐る逃げていたシャチも、しだいになれてきて、体をさわったり、水中で握手をしたりできるようになりました。今では、なれすぎて、係員が水中に入ると、いいオモチャとばかりに、しつこく遊びにきて、係員の方が、逃げまわるしまつです。このような、係員とのスキンシップのほかにも、イルカ達との交流も行なわれました。野生の時には、海の王者として、イルカもおそってたべてしまうシャチも、飼ってみると、そのようなことはなく、イルカと仲良く友達になれることが、以前の例でわかっていました。今回もイルカといっしょにしたところ、バンドウイルカやオキゴンドウに出会ったシャチは、びっくりしたのか、イルカに追われて逃げまわり、プールの水面が大波のように揺れ動くほど大

▲キッズのプレゼント

▲中央のプールでショー公開中のシャチ

さわぎとなりました。しかし、なれるにつれ、おたがいを認め合うようになり、今では、イルカがいても平気で芸をするようになりました。
しかし、今年で、シーワールドに来て11年になる、オキゴンドウの「レオ」と一緒にした時だけは、違っていました。レオがシャチと一緒のプールへ入ると、いつものようにシャチが逃げていましたが、途中から、シャチの方からレオにこうげきをしかけていったのです。このようなことは、初めてでした。それに、キングとカレンが協力してレオと争い、レオもまけずに反撃するなど、追いつ追われつの争いが続きましたが、結局勝負はつかないで終りました。レオは、今までのシーワールドのイルカの中ではボス的存在でしたが、シャチと、そのボスの座を争ったため、ほかのイルカ達の時とは違った争いになったのかも知れません。

このようにシャチ達も、新しい環境になれてくると同時に、シャチの能力を皆さんに理解してもらうために調教も行なわれてきました。調教は、イルカと同じように、エサと笛の合図の条件づけから始められ、だんだんむずかしいものへと進められてきました。キングとカレンは、今では、11種目以上の芸を覚えました。これらの芸の大半は、シャチたちの自然の遊びや動作を利用して調教したものでした。また、これらの芸は、ほとんど同時に二頭のシャチができるようになりました。そのわけは、一頭が行なう動作をもう一頭もまねして行なうためでした。シャチは物覚えが良いので、これからも、色々な芸を覚えて、皆さんにお見せすることができることでしょう。

昭和45年9月に当館では、日本で初めてのシャチの飼育を始めましたが、アメリカから来たこれら二頭のシャチは、日本の気候の変化に順応しきれず、3年11ヵ月で残念ながら飼育が終ってしまいましたが彼等の残してくれた貴重なデーターをもとに、アイスランドからやって来た「キング」「カレン」の二頭のシャチを大切に飼育し、ぜひ二世誕生を実現させるようがんばるつもりでいます。　(前田・古賀)

トピックス◎ペアーで飼育世界記録を樹立 マンボウ No.6・No.9

昭和56年2月14日、2尾のマンボウ(No.6・No.9)がそろって飼育日数789日となり、宮城県松島水族館の「プクプク」のもつ788日を抜き飼育世界記録を樹立しました。これらのマンボウは昭和53年12月18日に鴨川沖の定置網で捕獲されシーワールドへ運び込まれてきたものです。当初は予備水槽での仮住まいでしたが、昭和54年4月に待望の展示水槽(マスコットコーナー:幅6m、奥行き4.6m、水深2.4m)の完成とともにこの冷暖房完備の新居に移り住みました。

426日という当時の世界記録をつくった「ナンナン」は私達にマンボウの飼育方法についてたくさんの資料を残してくれました。それまで不可能と思われていたマンボウの長期間飼育がナンナンにより可能となったといっても過言ではないでしょう。その後、この貴重な経験をもとにNo.6とNo.9の飼育は順調に続けられ、捕獲時には体長が45cmと47cm、体重が約5kgと6kgしかなかったのが今では体長が約115cmと90cm、体重が約70kgと35kgにも成長しました。また、昨年の3月と4月から新たに2尾のマンボウが加わり、マスコットコーナーはこれらの成長したマンボウ達にとっては少し狭くなってきました。「一日でも飼育記録を延ばしたい!」という思いとは裏腹に「海へ帰してやろうか?」といった声が聞かれる今日此の頃ですが、そんなことにはおかまいなく4尾のマンボウ達はシーワールドを訪れる多くの人々に愛きょうを振りまいています。　(祖一)

▼飼育世界記録を樹立したマンボウ

特集 鴨川シーワールド10年の歩み

昭和45年10月１日、社会教育の場・レクリエーションの場・研究機関としての役割を目的とした教育観光施設『鴨川シーワールド』が開館し、昨年10周年記念祝賀会を開催する迄になりました。

10年を振り返ると45年９月４日アメリカよりシャチ２頭を搬入し我が国初のシャチ飼育を開始、又これより先44年11月アマゾンカワイルカ２頭が展示動物第１号として搬入されました。動物搬入で忘れられない事は51年９月19日当館スタッフの手によりカナダハドソン湾にて捕獲したベルーガ３頭の搬入と55年２月２度目のシャチ２頭を搬入した事でしょう。

10年が過ぎますと子供も沢山産まれました。48年は『ハマクマノミ』が日本動物園水族館協会繁殖賞を、55年には『イバラタツの繁殖』について同協会より研究表彰を受けました。そしてフンボルトペンギン、バンドウイルカの出産も相次ぎ、毎年のように出産しているアザラシは51年３月にゼニガタアザラシとゴマフアザラシとのあいだに出産があり交雑種の繁殖に成功しました。

飼育技術も向上し49年３月沖縄国際海洋博覧会政府出展水族館の飼育運営業務を委託され同博覧会終了後南オーストラリア州政府よりオーストラリアアシカ３頭の寄贈を受けました。

香港オーシャンパーク、西オーストラリア州マリンライフパークの設立協力、カナダバンクーバー公立水族館との動物交換等海外水族館との協力も数多く行なわれました。又技術開発に於いては53年８月オキゴンドウによる〝クジラのロデオ〟ショーを開発、53年８月17日にはマンボウの〝ナンナン〟が飼育世界記録を樹立、54年２月アンコウが飼育世界記録を樹立した事はご存知の通りです。

学術調査協力ではガンジス、ラプラタ、ヨウスコウの３種類のカワイルカ調査でインドへ、南米へ、中国へと奔走し外洋性サメの捕獲輸送実験では相当の成果を収める事が出来ました。

記念すべき出来事は48年３月24日皇太子殿下御一家の御来臨を賜り、開館以来の入園者数は52年10月に500万人、55年８月には700万人となり入園記念表彰が行なわれました。

そして10年『生来の能力を発揮し人々に笑いと驚きを与えてくれ、人間と動物のふれあいに多大な貢献を果たしてくれた』との感謝状が水族館長より動物達に贈られ労をねぎらいました。

過去を振り返りこれからも設立の目的にそう様努力を重ねて行くつもりです。

10年のおもなできごと

昭和56年１月　動物友の会会員数は増加の一途をたどり現在480名となる。

昭和55年８月　開館以来700万人の入園客を迎える。

昭和52年10月　開館以来500万人の入園客を迎える。

昭和49年３月　沖縄国際海洋博覧会政府出展水族館の飼育運営業務の委託を受ける。

昭和48年７月　社会教育活動を進めることを目的に、動物友の会を設立。

〈サマースクール〉
昭和48年８月　夏休みを利用し子供達に海の動物をより知ってもらおうと始められ、昭和55年には８回目を数える。

昭和48年８月　皇太子殿下ご一家ご来館。

昭和45年10月　海の総合レジャーセンターとして華々しく開館。

10年の調査研究のあゆみ

昭和55年３月　バンクーバー水族館「ウォーターズオブジャパン展」の協力及び魚類交換。

昭和55年５月　オーストラリアマリーンライフパークへの技術協力開始。

昭和54年４月　ヨウスコウカワイルカの調査実施（中国）。

昭和53年７月　外洋性サメの捕獲輸送、実験を行なう。

昭和52年３月　アメリカのニューヨーク水族館とカナダのバンクーバー公立水族館へタカアシガニを輸送。

昭和51年４月　ホンコンオーシャンパークへの技術協力開始。

昭和47年12月　ラプラタカワイルカの学術調査への協力（南アメリカ）

昭和45年２月　ガンジスカワイルカの学術調査への協力（インド、バングラデシュ）

10年の動物たちのうつりかわり

昭和55年５月　イバラタツの繁殖にて日本動物園水族館協会より研究表彰を受ける。

昭和55年２月　シャチ（サカマタ）２頭、アイスランドより搬入。

昭和54年２月　アンコウ飼育1000日を越え世界記録更新中。

昭和53年８月　マンボウ「ナンナン」飼育世界記録（426日）を樹立。

昭和51年９月　カナダにて捕獲されたベルーガ（シロクジラ）３頭搬入。
同年９月バンドウイルカの繁殖に成功。

昭和51年３月　ゼニガタアザラシとゴマフアザラシの交雑種の繁殖に成功。

昭和51年１月　オーストラリアアシカ３頭、南オーストラリア州政府より寄贈される。

昭和50年３月　ゴマフアザラシ初めて繁殖に成功。

昭和48年６月　ハマクマノミの繁殖にて日本動物園水族館協会より、繁殖賞を受ける。

昭和45年９月　日本で初めてシャチ(サカマタ)２頭搬入。

昭和44年11月　アマゾンカワイルカ２頭搬入。

56年
53年
50年
47年
44年